「核兵器は地球を守れるか」　　三浦涼香

「幸せと笑顔の先に」

小学六年生の頃、授業内で原爆について学ぶ機会があり、周りの生徒が「怖い、見たくない」と叫ぶ中、ただ一人私は、このような悲惨な出来事を必ず繰り返してはいけないとノートに感想を綴った。「三浦さんは他の生徒とは違った視点を持っているね」と担任の先生から褒められたことがきっかけに、私は、原爆や核兵器について関心を持つようになった。高校時代には広島でピースフォーラムに参加し、現在では大学の卒業論文執筆に向け、「様々な視点から見る原爆への解釈」とテーマを題し、研究を進めている。

核兵器の保有を正当化するとき、それは原爆投下を正当化することと同じであろうか。私自身、研究上、核兵器よりも原爆に着眼点を置くことが多いが、唯一の戦争被爆国として世界に平和を発信し続ける日本は、未だに後遺症やトラウマなどの心理的被爆という「生きた原爆」によって、多くの人々が傷を癒すことなく苦しんでいる。正確に述べるならば、唯一の戦争被爆国という表現には少し語弊があり、1945 年に米国で行われた世界初の核実験「トリニティ実験」や、太平洋のビキニ環礁で実行された水爆実験などにより、自然や地質のみならず、私たち人間までが被爆し、地球全体が脅かされている。核兵器は地球を守れるか、という問いに対し、私たち人類は既に身をもって答えを示してきたであろう。それでもなお、この問いに賛否両論が絶えないのは、核抑止論が広範囲に渡り唱えられ、過去の戦争が単なる歴史の教科書の一ページと化し、風化されているからだというのは明確である。また、昨今のウクライナ情勢にみるように、核兵器問題はますます現実味を帯びるようになり、誰もが核ボタンを押せる状況へと導かれた。

日本は平和だから？単なる一般市民だから？他の国の出来事だから？こう思うのにも無理がない。核問題のみならず、環境問題や人権問題など、世界には多数の課題が存在し、常に私たちは社会のあらゆる問題と背中合わせであり、また、共存を強いられているようにも感じる。正直、私含め誰もが、地球上から一斉に核兵器を無くすことができれば平和になる、という思考が頭をよぎったことがあるのではないだろうか。地球上に存在する全ての問題は、一見複雑そうに見えて、実は単純かつシンプルであり、全ては人間が起こした行為であり、それらは全て人間の力によって解決できるというのが私の考えである。しかし、そのような考えは通用せず、終末時計の針は一刻と時を刻むばかりであるのが現実問題だ。

大学四年の春、私はカナダに留学に行くことを決意した。そこでは、ウクライナ出身の中学生の少女と出会うことができ、交流を深めるうちに、何度か一緒に遊びに行く機会もで

きた。ある時、ふと思った。あぁ、平和とはこういうことなのだと。たった何気ない日常が真の平和なのだと。彼女の笑顔が眩しく見えた。そして、私も幸せになった。平和とは、単に戦争が無い状態ではない、ということを身をもって実感した。もう二度と、彼女の笑顔を奪わないでほしい、そう思い、私は平和運動や戦争に対する研究を再開し始めた。人の笑顔も幸福も守れないのに、地球など守れるわけがない。私の曽祖父は、実際に長崎にて被爆をし、放射線が原因で帰らぬ人となった。直接会ったことはないが、今というこの時に、平和研究をしていることに深い使命を感じる。

今年の 6 月、広島を訪れた際に、被爆体験の伝承講話を聴く機会があった。そこでの被爆者の一言が忘れられない。「過去は変えることはできないが、君たち若い世代は未来を変えることはできる」と。今年で原爆投下から 78 年目を迎える。今年 5 月には広島で G7 サミットが行われるなど、ウクライナ情勢の緊張が続く中、国際社会が直面している平和問題は、以前よりも増して注目を集めるようになった。「過ちは繰り返しませぬから」という文に主語がないのは、日本人でもなく米国人でもなく、全人類であるからだ。恐らく、過ちという言葉の解釈も人それぞれであろうが、今もなお、各地で軍事侵攻が続く中、この碑文の意味をもう一度確かめたい。核兵器保有は、いかなる場合であっても、生命を脅かす脅威であることに変わりはなく、正当化されることを許容してはならない。それは、78 年前に、私たち人類が教えてくれたことであり、次は私たち若い世代が、核なき未来へ続く人類のために語り続けていくことだ。